

市民公開講座

時間：7月10日 16:30-18:00

場所：横浜市開港記念会館講堂

1. 「精神科医をどう選ぶか」

講師 宮岡等（北里大学医学部精神科学）

司会 白川教人（横浜市こころの健康相談センター）

2. 「大人の発達障害をどう支援するか」

講師 井上勝夫（北里大学医学部精神科学・地域児童精神科医療学）

司会 富田富士也（子ども家庭教育フォーラム）

神奈川県や横浜市以外にお住まいの方も参加していただけます。

問い合わせは、運営事務局 エム・シー・ミューズ 03-3812-0383、info@mcmuse.co.jpまでお願い致します。

<講演抄録>

1. 精神科医をどう選ぶか（宮岡等）

精神科や心療内科にかかっている患者さんやご家族から「医師が話を聞いてくれない」、「薬が合っていないのではないか」、「具合が悪いと話すとそのたびに薬が増える」などと相談される場面が増えました。この講演では「精神科医をどう選ぶか」として、以下のような流れで、いくつかの指標をあげてみたいと思います。

. 受診する前

- 1) ホームページやマスメディアの情報
- 2) 医師や友人からの情報

. はじめて受診した時

- 1) 面接内容と面接の状況
- 2) 呈示された治療方法や副作用、転帰に関する説明

. 治療を続けている時

- 1) 症状が悪くなった時の医師の対応
- 2) 薬の内容と種類、量
- 3) 調剤薬局薬剤師の活用

参考書籍：宮岡等（2014）. うつ病医療の危機 . 日本評論社

2. 大人の発達障害をどう支援するか（井上勝夫）

子どもの精神科のみで対応されることが多かった発達障害が、今や大人の精神医療にも広がっています。そのメリットは少なくないのですが、活発な啓発活動とともに、情報がやや粗雑になっているようにも感じられます。このような中、大人の発達障害の支援を述べる前に確認しておくべきことがあります。それは、発達障害についての正確な理解、そして、支援の時の基本的な考え方です。この市民講座では、まず大人の発達障害についての正確な知識と支援の際の基本的な考え方を説明致します。つぎに、演者が普段の診療の中で実施している工夫、そして実感している課題をお話し致します。さいごに、Q&Aをいくつかあげたいと思います。

はっきり言えば、精神科医は、なるべく「発達障害」という言葉を使わない方がよいと演者は考えています。臨床でいう発達障害には、知的障害（MR）、学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）、そして自閉スペクトラム症（ASD）などが含まれています。これらの障害は、たしかに併存が少くないのですが、かといって全てを「発達障害」でくるのはいかにも大雑把です。問題の本質が見えにくくなるのです。MRでは、相当する精神年齢の評価が大切です。LDでは、障害領域とその重症度の把握が重要です。ADHDでは、認可された対症療法としての薬がありますので、正確な診断と薬の適応の判断が医師に求められます。ASDは、アスペルガー症候群を含め、広汎性発達障害などと呼ばれた時期もあり、病名そのものが短期間で変更されています。これは、疾患概念に流動的な部分が多いことを示していると考えられます。

支援の基本的な考え方として、工夫の余地を常に本人と環境調整の両方に探ることを、演者は念頭に置いています。発達障害は、問題の責任の所在を「障害」に押し込めて安心するための言葉ではありません。そうではなくて、今その人や周囲の人が困っている事柄を解決する手がかりを得るための言葉です。MRやADHDやASDなどの専門用語から、実行できる具体的な工夫を見出すことや、これから努力がより効果的なものになるための糸口を探ることに意味があるのです。そうななければ、診断そのものが無意味なわけです。おそらく、工夫を探る中で再確認されるのは、「適材適所」と「ユニバーサルデザイン」の発想だと思います。

Q&Aでは、「発達障害は治りますか？」「発達障害と個性はどう違いますか？」などを取り上げます。